

青僧会がシンポ

6月12日門徒推進員の集いを別院で、推進員百二十一人中、四十一人が参加、講師は本山から樟原宏朗師、14、16日別院の永代経法要。本多龍雄師(出石組乗専寺)が講師。聴聞にきたおばあちゃん「ありがたい話しじゃった」

山崎一朗師(出石組正福寺)を講師に、坊守さんたちは熱心にノート。21日別院で同研修会。阪神・神戸・丹波から七十一人。講師は杉本昭典師(北摂組光澤寺) 21日青年僧侶の会、十周年記念のシンポジウムをオリエンタルホテルに信楽峻鷹、大村英昭、久堀弘義各師を招いて開催。「我々の寺に墓がある限り真宗はやがてつぶれるだろうな」と一人の若い僧侶がつぶやいた。それを聞いていた老僧が「それはお前、反対だよ。墓がある限り我々の寺は絶対につぶれはしないよ」。

二十一世紀の教団、僧侶のあり様の中での信楽先生が出されたお話しが、終了のあとまで頭に残りました。27日岡山北組浄円寺で仏婦ブロック別研修会。岡山の四十九人。本山から三宮義信師、28日姫路西組本徳寺で同仏婦研修会。東播・姫路の五百七十三人が本堂を一杯にうづめる。三宮師の話に熱がこもる。

7月1日西播地区の八百七十七人が集って同仏婦研修会。同じく本徳寺で三宮師、3日第五期連研修了者大会。本山・本願寺・会館で。実施三十六組から

教区だより 8月

Table with 2 columns: Date and Event details. Includes events like '大谷尊由師50回忌法要', '第25回教区少年サマースクール', '企画推進室会議', etc.

「地についた仕事を」

小滝 了信 新所長

徳川前所長は山口へ

戻り梅雨のそぼ降る七月十八日(月)午後、神戸中央区のチサンホテルにて、兵庫新旧所長の歓送迎会が行われた。一年九か月余、所長の重責にあった徳川英範

師が七月一日付で山口教区教務所長に転任され、後任として、福岡教区教務所長の小滝了信師が同日付で発令された。歓送迎会は同日午後二時

開会、豊原大潤前宗務総長をはじめ教区の主だった人たち百二十人が出席。徳川前所長が多数のご出席に感謝の言葉をのべたあと「一年九か月余墮眠墮食、指導性に欠けたわたしを、お育て下さったことをほんとう

にありがとうございます」と、深々と一礼。つづいて小滝新所長が次のようなあいさつを行った。「大柄で偉丈夫の先輩、徳川前所長のあとに、小柄で後輩のわたしが参りました。福岡教区から吉川元所

Table listing names and dates of various events and appointments, such as '生前のご苦勞を偲び、謹んでお悔み申し上げます'.

兵庫から仏法を題字について

「教区新報」の題字を新しくしました。英語のHYOGOをバックにしたのですが、HとOを大きくしました。

「教区新報」の題字を新... 兵庫は水の豊かなところ、六甲の水や西宮の宮水はあまりに有名。小さな「YOG」はYOG L TやYOH GAにも通じるかも知れません。

「法」... これまでは組相談員よりの配布でしたが、各寺院に送付してほしいとの声や、教区の行事の様子をもっと載せてほしいとの意見もあり、十三号から今回の形とさせて頂きました。毎月発行の予定でありますのでよろしく指導、ご協力お願い申し上げます。(事務局)



1988.8.13号

浄土真宗本願寺派 兵庫教区教務所 〒650 神戸市中央区下山手通8丁目1番1号 (本願寺神戸別院内) 電話 神戸(078)341-5949(代)



小滝新所長と徳川前所長が固い握手 (神戸のホテルで開かれた新旧所長歓送迎会で)

長、徳川前所長そしてわたしと、三代にわたって同じコースです。福岡は兵庫教務所長の転勤コースかといわれたほどです。兵庫は福岡にくらべて寺院数は倍、ご懇志は数倍であり、この大教区に赴任したことは身の引きしめる思いです。これからは地についた仕事をいたしたく急ぐべきは急ぎ、慎重に宗務をとるべきだと考えております。今後、教区のすべてのみなさまのごべんたつこのほどお願い申し上げます。その後、豊原前所長のあいさつ、森本美栄子寺婦連盟会長から花束贈呈。堀静男宗会議員の乾杯音頭、いよいよ懇親会に入り、歓談の渦。その間、豊原大成九折舞寿宗会議員のあいさつ、寺田義淳宗会議員の祝電披露、佳境に入ってからオケの演歌が出るなど、なごやかな一刻であった。二時間余のあと散会した。



人生は「コトバ」によって成り立っているのではありませんか。私は生来低声の上に難聴で苦勞するが、いよいよ言葉の交流の大切さを知らされる。その私達に取って最も大切なのは「アミダ仏」との「コトバ」の交流であり、名号を私の声に出すことである

「コトバ」... ミダ仏の仕事は「コトバ」になって、人の身の前後左右を問わず「耳」から入りこむことである。わしに「マカセヨ」と常にいわれる。私はハイハイと答えるばかりである。(豊原大潤)

お盆の法話

この私が救われる

西脇 正文

五月雨の降り続く季節が終わりますと、真っ赤な太陽の燃える日本の夏がやってきます。日本の夏はさまざまな行事で彩られますがそのなかで民族の行事ともいえるものは何と云っても「お盆」でありましょう。

今年もその「お盆」の季節がやってきます。私たちはこのお盆を迎えるについて、一度その由来をたずねてみたいと思います。

昔、お釈迦さまのお弟子に、神通力第一といわれた目連という人がおりました。

あるとき、彼は、その神通力をもって、亡き母をみたのです。すると、彼の母は、餓鬼道に堕ちて、それはみるも哀れな姿になっていました。この餓鬼道の苦しみは、まるで逆さ吊りにされたような苦しみで、これを「倒懸」という言葉で表現されました。

古代インドでは、この「倒懸」の苦しみから救われることを「ウランバナ」といい、この「ウランバナ」が、中国で「孟蘭盆」と漢字に写されたと伝えられています。

お盆という言葉は、この「ウランバナ」つ



本願寺「カット集」から

まり「孟蘭盆」に由来するのです。ところで、目連は母を哀れと思い、いろいろ

ろと飲食物を用意するのですが、それがすべて火となるため口に入らず、苦しみはますます深まるばかりです。目連は泣く泣く、お釈迦さまに、この母を苦しみから救う道をお尋ねしました。お釈迦さまは、目連からこの一部始終をお聞きになって、

「目連よ、よく聞くがよい。そなたの母は、そなたを大きくするために、自らも顧みず、慳嗔（ものおしみ）の罪を犯したのである。目連よ、そなたの母は、その報いによって、いま餓鬼道に堕ち、倒懸の苦を受けている。しかし、目連よ、これはそなたの母のみの苦ではない。世の親たちは、すべて子育てのために、そなたの母と同様の苦を受けている。目連よ、そなたは、そなたの母を救うのみでなく、世のすべての母を救うために、大衆に供養するがよい。そうすれば、そのそなたの法供養のころによって、世の母たちは必ず救われるであろう」と、こころ優しく説法されました。

インドには、長い雨季があります。目連は、その雨季の明けのを待って、早速、大衆にすばらしい法供養をいたしました。こうして、目連の母は、餓鬼道から救われ、天上界に生きることができました。

私は、このお盆の由来を味わうたびに、悲しい思いがしてなりません。それは、このことが三千年前のインドの昔話ではなく、現代

社会にも通じるものがあるからです。

ともすれば自分のエゴの殻に閉じ込めり、小さな幸せを求めて他者を顧みないマイホーム主義のあり方、さらには子ども可愛さからかえって家庭を破壊に導く親たちの姿が、大寫しになってくるのであります。

「倒懸」の苦は、そのまま現代の親たちの苦悩そのものともいえましよう。

お盆を迎えて、私たちは、これを伝統的な祖先崇拜の習慣・行事にとどめることなく、「倒懸」の苦の中にある私自身を顧みることこそ大切ではないでしょうか。

親鸞聖人は、私がすべての苦から救われていく道は、

われをして世においてすみやかに正覚を成りて、もろもろの生死勤苦の本を抜か

したまへ

『仏説無量寿経』(注釈版十四頁)

と願われた法蔵菩薩(阿弥陀如来)の誓願を深く聴聞することであると、お示し下さいました。

私たちは、この誓願を聞きひらき、念仏に生きる道を力強く歩ませていただきたいものです。

「ウランバナ」とは、この私が救われていることを意味した言葉です

(揖電西組超念寺)



今、お寺で

連研の場づくりを

いま、第六期の連研がスタートした。姫路西組では地域的なことから、夢前地区(飾磨郡夢前町六か寺)と、姫路地区(姫路市西部十七か寺)の二つのグループに分かれて開催している。



で密接な関係にあるという、地域的な特性が連研を充実させている。そして、夢前地区ではこの点をさらに発展させ、夢前町内の真宗門徒であれば、六か寺以外の門信徒であっても広く受け入れる方式を取っている。これは、組というワケにとられない組の相互間交流とも言うべき姿を示している。姫路地区は、かつて亀山「本徳寺」を中心とした、

浄土真宗の熱心な信者(念仏者)が育った土地であった。しかし今日、真宗門徒としての自覚といったことについては、近年の宗教事情の中にあつて、各寺住職方が様々に努力されているが、かなり厳しい状況になっている。いますぐ連研によって、このことが解決されると思われないが、連研にそれを望むことは、あながち間違いないと思う。先日始まった姫路地区の

お盆の心

生かされている

日本にはさまざまな「お盆」があります。また、その理解にも多様性があります。真宗というホントの意味は次のうちどれでしょうか。

- ①ウランバナ(逆さ吊り)の略で苦しみをうけている先祖が救われるよう願う日。
- ②先祖がもどつてこれらるので迎える日。
- ③亡き人の精霊を迎えてまつる日。
- ④子孫に供養されない霊が逆さ吊りになっているので助ける日。
- ⑤迷っているのは亡き人でなくこの私だったと気づいて、法を聞き、生かされて生きるようこびを味わう日。

連研では、講師から迷信俗信の問題が提出されたが、真実の宗教に身をおく者のありようなどは「今までの生活の中の理解と余りにも違っていた」と驚く参加者が多かった。このように、参加者の中には、真宗の教え・依つて立つ場を初めて、あるいは改めて聴いて、驚きを覚えた人も多いと思われる。こういった驚きを持つ人達の中で、さらに真実の教

えを伝えて行く人(門徒推進員)を育てるためには、かつてわれわれ僧侶が得度や教師習礼、あるいは自坊の生活の中で覚えて行ったように、連研参加者が肌で身につけるよう指導されるものであるか。正しい教えがいつとはなしに身についている、こんなことも、連研の場づくりを通して、考えてみたいものである。

姫路西組相談員 高坂 龍司